

よりついなかう參る、御さか月のうちに、かきまいらせらる、べちでんに女院の御所へならします、こん三こん參る、御みやげに、まろがね十まいらせらる、三の宮の御かたへ、ひいなはりこ一つ、み參る、女院の御所々々へ、いつものごとく御ほしまいらせらる。

○按ズルニ、是歲八月ニ閏アリ、因テ年内ニ二度ノ節分ノ祝アリシナリ、

〔百一錄〕寶永七年十二月十七日、節分、市中輩内侍所參詣、當年停止、

〔續百一錄〕延享三年正月十四日、節分、内侍所へ御初尾貳百文、

〔花營三代記〕應永二十八年正月八日己卯、節分大豆打役昭心、カチグリ打、アキノ方、申ト酉ノアイ也、アキノ方ヨリウチテ、アキノ方ニテ止、

〔齋藤親基日記〕寛正七年正月十一日、節分御方違御成、伊勢守春日亭

○按ズルニ、節分方違ノ事ハ、方枝部陰陽道篇方違節分忌條ニ在リ、

〔親俊日記〕天文十一年正月十二日癸巳、節分、坂本へ御鏡、節分祝物共下之、

〔臥雲日件錄〕文安四年十二月廿二日、明日立春、故及昏景、富每室散熬豆、因唱鬼外福内四字蓋此方驅儼之様也、

〔宗長手記〕廿五日、大永六節分の夜、大豆打つを聞て、

福は内へいり豆の今夜もてなしに拾ひくや鬼は出らん

〔宣胤卿記〕文龜元年十二月十九日癸亥、今夜節分、續心經打大豆事等如例、

〔言經卿記〕慶長九年正月七日戊午、節分之神供已下祝詞如例了、豆ヲハヤス、大澤彌七郎也、

〔道の幸〕下廿三日、寛政四年十二月中略菊川にいつれば、家ごとに長き竿にいがきつけて、しきみさしたるを、庇の柱にゆひそへて立たり、何ぞとへば、けふはせちぶでござりますから、鬼おどしをたてまするといふ、しきみにやとへば、かうの葉なりといふ、猶とへど、しきみとはいはで、かうのは、